

## 乳幼児期における保育施設での生活への「適応」に関する論考

後藤 由美\* 鈴木 裕子†

\*大学院生

\*愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻

### The Concept of "Adaptation" to Life in a Child-Care Facility during Infancy

Yumi GOTO\* and Yuko SUZUKI†

\* Graduate Student, Cooperative Doctoral Course in Subject Development in the Graduate School of Education, Aichi University of Education & Shizuoka University, Kariya 448-8542, Japan

#### 要 約

保育施設における生活で、子どもは集団・環境への適応が望まれている。そこでの「適応」とはいかなる状況をめざすものなのか。本研究では、諸々の学問分野や社会的側面において「適応」はどのような意味や位置付けで扱われてきたかを、先行する文献や研究より素描する。適応の概念は大きく分けて、環境や事象に対する適応と、ヒト自身の適応力の向上に分けられ、保育の中での適応は、集団適応、社会的適応、生活的適応、適応行動、心理適応が挙げられ、各視点から環境構成や援助方法などが検討されている。乳幼児にとっての適応とは、心理的に能動的かつ情緒的な安定を得ながら環境と適切に関わることと定義できる。子どもがどれだけ心地よく過ごしているかという子どもの居場所感を捉える視点と、子どもがどれだけ活動に没頭しているかの視点は、「適応」の情緒的な安定であり、子どもが園環境・生活に能動的に関わることが含まれることが分かる。その結果、「安心・安定」「夢中・没頭」の評定で「適応」を描写することが可能であることが示された。

Keywords : 適応 乳幼児 保育施設

#### I. 本研究の目的

ヒトは、集団の中で心身の発達や成長に伴い、ものやヒトと関わりながら人間形成をしていく。生理的早産として誕生した人間は教育（保育）のはたらきかけが必要不可欠である<sup>1)</sup>。ヒトは集団の中で育つことで成長していくため、どのような集団なのか、どのような環境なのかがヒトの成長に関わる。

特に保育施設<sup>注1)</sup>では、まさに集団を通して生活を行っている。保育施設には待機児童解消に向けた施策が打ち出され、こども家庭庁<sup>注2)</sup>による「保育所等関連状況とりまとめ（令和5年4月1日）」<sup>2)</sup>では、保育施設の利用定員数は増え、待機児童は減少している。一方で保育施設には保育の質の向上が求められている<sup>3) 4)</sup>。保育施設は、乳幼児にとって家庭を離れ集団の

中で新しい人間関係を築きながら成長していく場である<sup>5)</sup>。保育施設における生活は、集団生活が基本となり、「適応」が求められるように見られる。では、そもそも「適応」とはどのような状況になることを示すのか。何に対して「適応」とすればよいか。保育という場では、大人である保育者は、どのような支援が求められるのか。

本研究では、諸々の学問分野や社会的側面において「適応」はどのような意味や位置付けで扱われてきたかを、先行する文献や研究より素描する。それらの背景から保育において必要とされ求められる「適応」を探る。

† 幼児教育講座 † Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

## II. 諸分野に見られる適応の概念

本節では、学術的な諸分野における「適応」の定義、「適応」の状況を文献研究から素描する。ここでは「適応」がどのような場面で論ぜられてきたのか、何に対する「適応」なのかを教育、社会学、環境科学、それぞれの分野から見ることにする。

### 1. 教育分野の適応

学校適応という分野では、学校教育における学習に適応する過程から学習方法や学校適応感との関連を検討<sup>6) 7)</sup>することで、学校教育に適応することの関連を明らかにする傾向が見られた。しかし、学校に適応をしても自尊心は乖離することもあり<sup>8)</sup>、スクールカーストとコミュニケーションスキルなどが学校適応感に影響があることが述べられている。さらに、教師の指導行動・態度により学校適応感を向上させる上で重要な働きがあることも示唆されている。学校適応感と教師のきめ細やかな対応が必要とされる<sup>9) 10)</sup>。

過剰適応とは、与えられた環境に馴染もうとする適応努力において、行き過ぎた適応努力であり、自閉スペクトラム症における過剰適応から見る不適応の予防<sup>11)</sup>や発達障害（傾向）への対応方法や継続的に通室させる適応指導教室の課題などが示されている<sup>12)</sup>。青年期の過剰適応では、自分を抑制したり、犠牲にしたりしながら生活を送っている状態であり、周囲の他者との関係の中で生じる現象や状態と捉え、過剰適応の尺度作成とそのような過剰適応状態が（不）適応指数との関係を分析し、過剰適応が生じる文脈や関係により影響が出ることが明らかにされている<sup>13)</sup>。さらに山田<sup>14)</sup>は、過剰適応を「よい子」のように自分の感情や欲求を無理に抑圧してでも、周囲の期待や要求に応える努力を行い、表面的には、社会に適応しているように見える傾向と定義し、過剰適応者が見捨てられ抑うつを抱えていることが明らかにしている。

心理的適応においては、自由選択の感覚・満足度・生活満足度を因子として、石井<sup>15)</sup>らは、ジェンダー・ハラスメント的な職場環境の認知が及ぼす影響を測定し、職場におけるジェンダー・ハラスメント不作為の認知が強いほど低い値が得られるという知見を示している。外国につながる子どもが文化の違いから学校生活への適応に向けての学習支援<sup>16)</sup>や母子相互信頼感や母子における親権威の不一致による子どもの心理的適応（抑うつ、不安、自尊感情）に影響を及ぼす<sup>17) 18)</sup>知見も得られている。親の養育態度は子どもの社会的適応（自尊感情と友人関係）に影響を与えていることも述べられている<sup>19)</sup>。また保育施設において幼小接続期や園内進級時における子どもの適応や心理社会的不適応を、評定を用いて分析した研究からも明らかにされている<sup>20) 21)</sup>。

このように、教育に関する適応は、学校を基盤とし

ている学校適応と生活に順応するための適応、子どもの成長に影響を及ぼす心理的適応や社会的適応が挙げられる。教育における適応は、環境への適応過程とひとの身体の発達に関する適応過程について述べられており、適応することで課題の解決方法が見出されている傾向がある。

### 2. 社会学関連分野の適応

社会学に関連する分野では、社会環境への適応、社会的適応への影響、その他の社会へ適応するのかについて検討されていた。

社会環境適応については、強く自己犠牲的な母親像を詳細に描き、母親と子どもの叫びを母親の養育力欠如の結果として切り捨ててしまう非メンタライジングな社会環境への適応手段として孤立を選ぶ過程の検討<sup>22)</sup>や親の離婚による日常的ストレスの緩和により適応を促すことが可能<sup>23)</sup>などの検討がされている。

医学適応と社会的適応への影響との検討では、不妊症における卵巣機能的低下に対する予防としての医学的適応と健康な女性が将来の妊孕性低下に足して行う社会的適応があり両側面からの検討が必要である<sup>24)</sup>。一方、少年犯罪社会学では、10代の若者は危険な行動に走りがちだが、環境に素早く適応することを述べている<sup>25)</sup>また、社会適応として、現代アメリカにおける移民研究<sup>26)</sup>が見られる。

社会適応とは、社会環境や社会生活において、何かの障壁を乗り越えたり、解消したりすることを適応としている。

### 3. 環境科学分野の適応

環境科学では、気候変動適応、適応効果とした地球環境や自然環境まで幅広く検討されている。

適応の先駆け的なものは、ダーウィン (Darwin. C)<sup>27)</sup>の「種の起源」にみられる。生物の進化の法則を明らかにしたダーウィンは、「種の起源」を通じた進化論の中で、生物が環境に適応するために変化をすることを述べている。生物の変化とは、生存闘争をする中で自然選択が起こり、変化し適応することで進化する。ここで言う生存闘争とは、生物どうしの依存関係や個体の生存だけでなく子孫の存続までも含んでいる。そうでないものは自然淘汰され、有利な変異は保存され不利な変異は排除される。このように生き物が環境に適した変化をすることを「適応」としている。山本<sup>28)</sup>は、ダーウィンの進化論を、形態や行動を環境との本質的關係を持つものとして論じており、本質的關係とは、形態や行動が生存上の価値と関係している。環境との関係においてより生存の可能性を高める形態が残され、そうでないものは淘汰される。環境は個体の生を可能にしている条件であり、その環境に適した行動をとることこそが、生存を導くものであり、生物

の形態や行動を環境への「適応」へ向けられたものとして捉えている。その後、生物と環境との関係を機能記述として試み、ギブソンのアフォーダンス概念を用いた環境記述の原点となっている。

Gibson<sup>29)</sup>のアフォーダンス理論は、観察者の欲求や知覚するという行為によって対象に付与されるものではない。対象は、それがどのような対象であるかによってそれがなるところのものを提供するのであると述べている。つまり、アフォーダンスとは、環境に存在し、動物に行為の可能性を提供する情報である。近年のアフォーダンスという概念研究として、尹<sup>30)</sup>は、メディア利用における「利用と満足」を、アフォーダンス概念を用いることで環境面より明らかにしている。その際、アフォーダンス概念を生物が知覚システムを活用して、環境の中から特定の情報を抽出しそれを知覚する過程であると解釈している。また、田村<sup>31)</sup>は、プロダクトデザインにおけるアフォーダンス概念とエスノメソドロジーへの展開を試みた。その中で、アフォーダンス概念とは、知覚と環境から直接的に、行為を可能にする情報が獲得できるものとしている。

一方、自然科学の側面において、三村<sup>32)</sup>は、日本における気候変動適応の現状を明らかにし、適応という切り口で地球環境変動へのあり方の提案をしている。例えば、果樹の気候変動適応の影響を、地形や土壌という視点から果樹栽培別の環境要因の特徴を定量的に検討し、各果樹栽培における土壌分類や土性区分を明らかにしている。<sup>33)</sup> 農業分野では、気候変動適応技術を、地域間で起こる波及状態、過程、要因から分析し、大規模な地域間交流、地域間の人的ネットワークによる波及・伝播の効果を明らかにした。<sup>34)</sup> 熊野らは、112の国と地域の海面上昇に対するグリーンインフラによる適応効果と費用を検討しマングローブ活用が有効であることと、国別では有効性に相違があることを明らかにしている<sup>35)</sup>。

このように地球規模の気候変動や地球環境、人を取り巻く環境や環境の変化に対する環境要因や技術を検討し、適応するための改善策を見出している。

#### 4. 諸分野に見られる適応が保育に示唆するもの

適応の概念は大きく分けて、環境や事象に対する適応と、ヒト自身の適応力の向上に分けられた。環境や事象に対してどのように適応してくのか、また適応するとどのような影響が見られるか、ヒトが適応していくための自身の変容が共通して述べられている。つまり、適応に関する研究は、ヒトが環境にどのように適応していくのかの過程や方法、ヒトが環境に適応するための働きかけや、環境の変化にどのように対応していくのかを検討しているのである。

ヒトに関する研究では、適応を促すことや適応を受け入れることは、ヒトの成長過程の中で、養育者以外

の大人と関わる保育の場でとても重要な働きかけである<sup>36)</sup>と言える。またヒトの成長過程による適応について、環境の影響が、子どもの行動に寄与することも明らかにしている<sup>37)</sup>。

以上のことから、適応という概念は、集団生活を通して遊びや生活を展開する保育施設や乳幼児期の子どもたちにも同様なことが言え、考究が求められる。

### Ⅲ. 保育における「適応」の位置づけ

本節では、保育における「適応」についての先行研究から概観する。

#### 1. 保育指針等に見られる「適応」の捉え方

厚生労働省(2018)保育所保育指針解説<sup>38)</sup>では、1 保育所保育に関する基本原則(2)保育の目標の中で、「エ 子どもの相互の関係づくりや互いに尊重する心を大切に、集団における活動を効果あるものにするよう援助すること、子どもは、互いを仲間として認め、集団の中で期待される行動や役割、守るべきルールなどを理解するようになる。このように集団で行う活動を中心とする生活に適応していく過程で、同時に、一人一人の思いや個性が十分に発揮されることも重要である」と記されている。

内閣府文部科学省厚生労働省(2018)<sup>39)</sup>幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説では、第2節「教育及び保育の内容並びに子育ての支援等に関する全体的な計画」の作成等1「教育及び保育の内容並びに子育て支援等に関する全体的な計画」の作成等(3)「教育及び保育の内容並びに子育ての支援などに関する全体的な計画」の作成上の基本事項ウ 入園から終了に至るまでの長期的な視野を持つこと 園児の幼保連携型認定こども園での生活への適応の状態、興味や関心の傾向と記されている。

「適応」の対象は、家庭とは異なる集団で行う活動を中心とする生活であり、「適応」の目的を、一人一人の思いや個性が発揮できるようにすることと解釈できる。

#### 2. 保育における適応に関する先行研究の傾向

本節では、近年の保育領域における「適応」に関する先行研究を概観する。

保育の中での適応は、集団適応、社会的適応、生活的適応、適応行動、教育臨床的適応、心理学的適応があり、それぞれの視点から、適応に向けた環境構成や援助方法などが検討されている。

集団適応とは、集団生活における適応が求められることである<sup>40)</sup>主な研究傾向として、保育者の関わりを通して、集団生活や生活文化を身に着けさせることの重要性や<sup>41)</sup>、小学校への移行期におけるレジリエンスと学校適応への相関に含まれる集団適応について

述べられている。集団適応については、1970年代から1990年代に多く研究されており、表現による集団適応<sup>42)</sup>、家庭の養育行動の影響が及ぼす集団適応<sup>43)</sup>、途中入園児の集団適応<sup>44)</sup>、障害児の集団適応<sup>45) 46) 47) 48) 49)</sup>、保育者による集団適応期の仲間づくり<sup>50)</sup>、集団適応の過程<sup>51)</sup>、集団教育施設への適応に向けた集団適応過程<sup>52) 53) 54)</sup>が挙げられた。集団適応とは、集団生活に適応するためにはどのような環境が必要であるか、また乳幼児期の発達を踏まえながら保育者が関わることで、集団生活に適応できるようにすることについて述べている。集団の中で適応するには、子どもがひとりで居られる時間と空間が重要であり、子どもの発達に応じた関わりが適応を促すことが示唆される。

社会的適応では、社会的適応性をヒトの生涯に亘る心身の健康や経済的安定性等とし、乳幼児期の「非認知能力」の形成の重要性を述べている。その中で、集団の中で自らの居場所、安心して生活していくための「協調性」「協同性」「道徳性」「規範意識」の重要性に言及している<sup>55)</sup>。社会適応を「保育園への適応」とし、母親のストレスとリスク要因の関連性を検討した研究も見られる<sup>56)</sup>。また、子どもの発達と社会適応の関連要因として、家庭における育児環境や保護者の育児サポートが関連していることも述べられている<sup>57)</sup>。以上から、保育における社会適応とは、保育という場を、子どもが自分の居場所や安心できる場として捉えられるようになることと論じている。

また人間は生理的に未成熟な状態で生まれ、生まれてからの周りの環境を通して育つ。子どもがあらゆる環境、生活文化に適応して生きていくことを、生活適応力活動としている<sup>58)</sup>。集団生活への適応場面における生活適応を、保育者の関わりに着目して、言語的、視覚的、環境的な技法を複層的に用いていることとした<sup>59)</sup>。ここで扱われている生活適応とは、子どもが生活に適応していく過程や集団生活に対する生活適応さらに、乳児の生活を指し、保育者が関わることで習得することが分かる。また、子どもは大人とのやり取りを模倣しながら、その行為を習得する過程のなかで子どもなりに動機づけをし、その活動には、子どもの内面の活動があると考え、子どもは内的活動をしていると考えることができるとした。子どもは環境や生活文化を通して生活をしながら適応していくということ、適応するには、大人と関わりしながら習得していることを示した。

子どもの適応行動には、例えば玩具や道具を得るために「貸して」などの表出や攻撃行動に代わる応答「やめて」などの表出がある<sup>60)</sup>。児童発達支援センターでは、保育の記録を心理学的・精神医学的観点から体系化した「保育記録による発達尺度(NurseryTeacher's Rating Development Scale for

Children: NDSC)」<sup>61)</sup>を用いて、適応行動を見ることが可能となり<sup>62)</sup>、気になる子の不適応行動への介入技法として、応用行動分析、ペアレント・トレーニング、ティーチャー・トレーニング、社会的スキル訓練、心理療法などを活用する有効性が検討されている<sup>63)</sup>。発達尺度や適応行動尺度として利用され、気になる子どもの生活において適応した行動を促されるよう介入技法を活用する事で有効であることが示唆されている。

内田ら<sup>64)</sup>は、教育臨床における適応とは、「子ども個人が自らもつ欲求を満足させながら、環境の諸条件との間に調和のある満足すべき関係をもつ行動をするように自己や環境を変容させる過程」としている。ここでの適応という概念は、様々な環境に応じて自ら条件をかけていくことや、安定した状態を得るための環境を積極的に変化させていくことである。さらに磯邊<sup>65)</sup>は環境に適応することを「適応とは、個人(主体)と環境(対象)との調和がとれている状態を示す。一方、不適応とは個人(主体)と環境(対象)との調和が乱れている状態と定義した。そのもとで、子どもの様々な問題を解決すべく環境の変化や行動を促すための援助方法や技法を検討している。

心理学における適応の分野からは、人が適応的に生活するためには深い情動の強さや長さを柔軟に調整できることが重要であることが論じられている<sup>66)</sup>。さらに、適応に近い概念として同調性をあげ、それは自分の純粋な情動を表現すると同時に、おかれた状況で自分に求められた他者からの要求や自分の目標と折り合えることであるとしている<sup>67)</sup>。

### 3. 保育における適応に関する先行研究

保育の場における適応に関する研究について、特に、子どもの行動変容、子どもの適応に資する保育者の質を扱ったものについて概観する。

子どもの行動変容に関する研究として、渡邊<sup>68)</sup>は、幼稚園の3歳児を対象に、登園後の身支度場面の映像を分析し、アフォーダンス・シグニファイヤという概念を枠組みとして、人との関係性を含めて明らかにした。その結果、身支度が習慣化されるにつれて園生活に適応していく姿が述べられている。

園生活や環境構成に着目した研究として、幼稚園入園期の3歳児の保育のポイントを分析し、園での生活の仕方や園生活の流れを理解し、主体的な行動ができるような環境構成の重要性を述べている<sup>69)</sup>。

真嶋ら<sup>70)</sup>は、幼児の園への適応と支援に関する文献を整理し、適応とは「幼児と環境との相互作用により、幼児が心理的な安定を得ながら、環境との適切な関係を構築すること」とし、個人の情緒的な安定と社会的環境との適切な関係を表す概念であるとした。

七木田ら<sup>71)</sup>は、発達に課題がある幼児が園に適応す

る過程を明らかにする中で、適応を「園環境における様々な影響の中で幼児自身が能動的に関わっていく過程」と位置付けており、子どもの発達や興味、性格と園生活における諸環境、場所、各活動、他児、保育者とのズレを園環境・生活における不適応と述べている。

子どもの適応に資する保育者の質研究として、上村<sup>72)</sup>は、保育現場では、多様な子ども集団の中で個々の子どもを見るという複雑な状況下において保育者は子ども理解を深めながら、一人ひとりの子どもたちとの関係を構築していく必要があるとし、子どもの適応に必要な保育者の資質を論じている。

若田ら<sup>73)</sup>は、保育者のエピソードの自由記述から分析し、保育者の個別支援や集団的支援の重要性を述べている。保育施設では、保育者の温かい見守りや寄り添い、応答的環境の中、子どもは周りとの思いのやりとりや試行錯誤、葛藤等、豊かな関わりが保証され、心と心との結びつきが築かれる場としている。子どもが園でかかわる人と適応していく過程では、保育者が子どもとの関係性の中で豊かな関わりが行われることが重要であること述べている。

鈴木<sup>74)</sup>は、乳児期から保育施設に在籍する子どもは、他児との関わりなどを通して仲間形成や思いを伝え聞き、葛藤や試行錯誤といった集団生活に必要な社会的意識を身に付けていくと述べ、初めての集団生活を体験する乳児が滑らかに生活することを「適応」として示している。

以上より、「適応する」ということは、子どもにとっての情緒的な安定であり、子どもが園環境・生活に能動的に関わる姿と捉えられることができる。初めて集団生活を送る乳幼児にとっての適応とは、心理的に能動的かつ情緒的な安定を得ながら環境と適切に関わることと定義される。

#### IV. 保育の質をよりよくする安心安定・夢中没頭

ベルギーのFerre Laeversは、保育の質を向上させる要件としたSiCs<sup>75)</sup>を開発した。要件①保育現場での自己評価ツールとしての機能、②子どもとその保育環境での体験を主な対象として質の高さを見る、③3歳児未満児の保育も含め、幅広い保育の提供に適したものでなければならない。

SiCsは、Ferre Laeversの長年にわたる実践経験から得られた物で、子どもがwell-beingとしての安らぎを感じ、のびのびとし、感情的な緊張からの解放とinvolvementとして、活動に熱心に取り組むことであり、深いレベルの学習と発達に必要な条件の2点から構成されている。

well-beingについてLaeversは、「水中の魚のように」と表現し、「楽しむ」「リラックスと心の平和」「活力」「開放性」「自己確信」「自分自身と向きあう」が重要と述べている。「楽しむ」とは、微笑

んだり笑ったり、自発的なおしゃべりや歌を歌う事を楽しむとしている。「リラックスと心の平和」では、表情は開放的で、緊張や落ち着きのない様子はなく筋肉がリラックスしている。「活力」とは、表情から読みとれ、生き生きとした表情で姿勢も直立することができることである。「開放性」では、大丈夫と感じることでオープンな態度が見られるようになり、他人に近づきやすく親しみやすい、抱き合う、褒め合う、励まし合うなどの行為が見られる。「自己確信」は、自己肯定感が高く不安やストレスが低くなることで、レジリエンスの基礎となり、自己主張が確立する。

「自分自身と向きあう」とは、感情を抑圧し、自分自身を理解することができるとしており、困難な経験から回復しやすくなるとしている。

involvementでは、「モチベーション」「満足」「激しい精神活動」「満足」「探求心」「自分の能力の限界」が重要とする。「モチベーション」は、活動に心から興味を持ち、駆り立てられる。それは自分の内側から湧いてくるものである。「激しい精神活動」では、経験に関与する中で、五感を通した広がりや深みを荒らしている。「満足」は、関与することで自発的に関わる姿であり遊びは最高の満足が得られる経験とする。「探求心」は、関与の源である発見や探求したいという衝動や、経験したいという衝動である。「自分の能力の限界」とは、活動への参加は、簡単すぎず難しすぎず、自分に挑戦する活動である場合にのみ可能であるとしている。

評価の手続として3つのステップがある。

ステップ1は、幸福度と参加度の評価である。極めて低い、低い、標準、高い、極めて高い、の5件法で評価する。

ステップ2は、収集したデータを分析する。観察中に幸福度と参加度の度合いをチェックし、その背景をアプローチし、子どもとその背景、例外的な状況などを記載する。

ステップ3は、保育を改善するために、リフレクションツールとして活用し、深く理解することである。

以上の手順で進めることで、保育の振り返りができ、子どもたちの「幸福度と参加度」が高まれば子どもたちの好奇心や探求心を含む人生の手助けができるとしている。

一方、秋田ら<sup>76)</sup>による保育のプロセスの質研究プロジェクトは、Laeversの哲学を受け継ぎ、保育の質を捉えるための「子どもの経験から振り返る保育の質プロセス」を作成している(表1)。この評定は、「安心・安定(well-being)」子どもがどれだけ心地よく過ごしているかという子どもの居場所感を捉える視点と、「夢中・没頭(involvement)」子どもがどれだけ活動に没頭しているかの視点で構成されている。子どもの姿を根底におき、保育実践を行うプロセスの

質をよりよくしていくためである。最終的に数値化することだけを目的としておらず、なぜこの値になったのかを考えたり、他の人と意見を交流したりすることが重要としている。項目からは、総体的に子どもの様子を捉えることが可能であると考ええる。

表1. 「子どもの経験から振り返る保育の質プロセス」による「安心・安定 (well-being)」「夢中・没頭 (involvement)」評定

評定	安心・安定 (well-being)
1	子どもが明らかに不快感を示している。
2	子どもの態度、表情、行動から、子どもの気持ちが安定していないことを示している。 しかし、1の項目ほど明確な様子は見られず、不快感が絶えず示されているわけでもない。
3	子どもの態度は自然で表情や態度に大きな変化がない。悲しそうなそぶりや喜びの表情、快適か快適でないかの様子もそれほど明確ではない。
4	子どもは、明らかに5の項目に書かれている満足の様子を示している。しかし持続的に絶えずその様子が見られるわけではない。
5	観察中子どもは楽しんでおり、実際満足している。
評定	夢中・没頭 (involvement)
1	子どもはほとんど何の活動もしていない。
2	子どもはある程度活動しているが、たびたび中断してしまう。
3	子どもはいつも忙しそうにしているが、何かに集中しているようには見えない。 決まり切った行動が多く、活動に表面的な注意しか払っていない。
4	明らかに子どもは活動に参加している様子が見られる。しかし、常に精一杯取り組んでいるとは言えない。
5	観察中、子どもは絶えず活動に取り組んでおり、完全に没頭している。

ここで「適応」を、この評定の視点との関連から考えてみたい。「子どもの経験から振り返る保育プロセス」は、子どもがどれだけ心地よく過ごしているかという子どもの居場所感を捉える視点と、子どもがどれだけ活動に没頭しているかの視点で構成されている。このことは、先述で述べてきた「適応」の情緒的な安定であり、子どもが園環境・生活に能動的に関わることが含まれることが分かる。本評定を活用することで、子どもの保育施設における生活の「適応」度合いを可視化できると考えられた。

## V. まとめ

本研究は、「適応」とは何かを諸々の学問分野や社会的側面の先行する文献や研究より素描した。はじめに、教育、社会、環境学、保育に資する「適応」から概念を整理した。乳幼児にとっての適応とは、「集団適応」「社会的適応」「生活的適応」「適応行動」「教育臨床におけ適る応」「心理学における適応」があり、それぞれの視点から、適応に向けた環境構成や援助方法などが検討されており、心理的に能動的かつ情緒的な安定を得ながら環境と適切に関わることと定義できる。

保育における適応研究では、保育において必要とされ求められる「適応」を探り、その結果、「安心・安定」「夢中・没頭」の評定で「適応」を描写することが可能であることが示された。

## 注

(注1) 保育を必要とする子どもを預かるために設置された施設。幼稚園、保育所、子ども園を指す。

(注2) 令和5年(2023年)4月1日に発足した。こどもが、自立した個人としてひとしく健やかに成長することができる社会の実現に向け、子育てにおける家庭の役割の重要性を踏まえつつ、こどもの視点に立って、こどもの年齢及び発達程度に応じて、その意見を尊重し、その最善の利益を優先して考慮することを基本とし、こども及びこどものある家庭の福祉の増進及び保健の向上その他のこどもの健やかな成長及びこどものある家庭における子育てに対する支援並びにこどもの権利利益の擁護に関する事務を行うことを任務とする。

## 引用文献

- (1) 田井康雄 (2020) 乳幼児教育指導者の専門性に関する研究 (1) - 人間形成的視点から見た乳幼児期の意義について - , 人間科学 2 巻, 54 - 63
- (2) こども家庭庁 (2023) 「保育所等関連状況とりまとめ (令和5年4月1日)」  
[https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/f699fe5b-bf3d-46b18028c5f450718d1a/7803b525/20230901\\_policies\\_hoiku\\_torimatome\\_r5\\_02.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/f699fe5b-bf3d-46b18028c5f450718d1a/7803b525/20230901_policies_hoiku_torimatome_r5_02.pdf) (情報取得 2023/11/22)
- (3) 大倉得史 (2017) 保育の市場化によって保育の質はあがるのか, 人間・環境学第26巻, 1-15
- (4) 神戸洋子 (2016) 幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園の保育者不足解消に向けて: 幼保一体化政策がもたらす問題点, 帝京科学大学教職センター紀要, 169 - 174

- (5) 平松美由紀 (2019) 環境を通して行う保育に関する一考察 - 乳幼児に関わる保育者の人的環境としての役割 -, 中国学園紀要 (18), 107 - 112
- (6) 桃坂七海 (2023) 英語科における記憶の課題 - 英単語の記憶方法に着目して - 福岡教育大学大学院教育学研究実践専攻年報 13, 381 - 390
- (7) 村井史香, 梅村拓未, 鈴木育美, 鈴木修斗, 渡邊仁, 加藤弘通 (2022) 高校生における「書く」「聞く」「話す」「読む」ことへの苦手意識に関する研究 - 学習の動機付け・学校享受感との関連の検討 -, 子ども発達臨床研究第 16 号, 3 - 25
- (8) 岩田みちる, 谷中久和, 関あゆみ (2021) 小学校高学年における学校生活と自尊感情・学校適応感の関係 - 予備的検討 -, 子ども発達臨床研究第 15 号, 51 - 56
- (9) 水野君平, 加藤弘通, 川田学 (2015) 中学生における「スクールカースト」とコミュニケーション・スキル及び学校適応感の関係: 教室内における個人の地位と集団の地位という視点から, 子ども発達臨床研究 7, 13 - 22
- (10) ト部慈子 (2020) 学校適応を促す組織運営に関する研究 - 5 部会のマネジメントを中心に - 福岡教育大学大学院教職実践年報第 10 号, 195 - 202
- (11) 千田若菜, 岡田智 (2021) 自閉スペクトラム症における過剰適応とカモフラージュの臨床的意義, 子ども発達臨床研究 15, 57 - 66
- (12) 佐々木香織 (2018) 外国につながる子どもの学習支援の現状と課題 - 外国人散在地域・仁賀田の事例より -, 日本語教育 170, 1 - 16
- (13) 鳳間惇希, 平岩賢二 (2015) 青年期における過剰適応について - 他者との関係の中で生じる現象という視点から -, 日本青年心理学会大会発表論文集 23 (0), 44 - 45
- (14) 山田有希子 (2010) 青年期における過剰適応と見捨てられ抑うつとの関連, 九州大学心理学研究 11, 165 - 175
- (15) 石井国雄, 田仲由佳 (2022) ジェンダー・ハラスメント的な職場環境の認知が就業意欲と心理的適応に及ぼす影響, 清泉女学院大学人間学部研究紀要 (19), 95 - 107
- (16) 渡邊賢二, 平石賢二, 谷伊織 (2020) 児童期後半から青年期前期の子どもと母親が認知する養育スキルと母子相互信頼感, 子どもの心理的適応との関連: 母親ペアデータによる検討, 発達心理学研究 31 (1), 1 - 11
- (17) 関山徹 (2018) 鹿児島県における適応指導教室 (教育支援センター) の実態と課題, 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 213 - 225
- (18) 田令令, 平石賢二, 渡邊賢二 (2017) 中学生の母子関係における親権威の概念の不一致と母子葛藤, 子どもの心理的適応との関連, 発達心理学研究 28 (2), 24 - 34
- (19) 島義弘 (2014) 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されているのか: 内的作業モデルの媒介効果, 発達心理学研究 25 (3), 260 - 267
- (20) 伊藤大幸, 野田航, 中島俊思, 田中大善, 浜田恵, 片桐正敏, 高柳伸哉, 村山恭朗, 辻井正次 (2016) 保育士の発達評価に基づく就学後の心理社会的不適応の縦断的予測: 保育要録発達評価尺度の開発, 発達心理学研究 27 (1), 59 - 71
- (21) 川島亜紀子, 泉紗恵, 野田多佳子, 古谷あゆみ, 古岡良介, 荻原ひろみ, 澤野琢朗, 紺野貴寛, 村田祐樹, 入月安奈, 笠原成晃, 青木央, 岩本純子, 大野歩み (2023) 幼小接続期における心理的適応: 担当保育者・担当教師による SDQ 評定を用いた以降前後の変化, 教育実践学研究 28, 131 - 143
- (22) 大橋良枝, 掛斐衣海 (2023) 「母親」の孤立を社会文化的価値観の文脈で理解する, 聖学院大学論叢第 35 巻第 2 号, 93 - 104
- (23) 姜民護, 黒木保博, 中嶋和夫 (2016) 韓国の離婚を経験した子どもにおける日常生活ストレス認知と適応の関係, 社会福祉学 57 (2), 81 - 92
- (24) 高橋俊文 (2022) 不妊症を生物学的: 社会学的に探求する, 福島医学雑誌 72 (1), 1 - 9
- (25) 上野正雄 (2017) 脳科学・神経科学の進歩と少年法, 犯罪社会学研究 42 (0), 65 - 71
- (26) 村井忠政 (2006) 現代アメリカにおける移民研究の新動向 (下): 移民二世の同化をめぐるポルテスの研究を中心に, 人間文化研究 6, 49 - 69
- (27) ダーウィン (2009) 種の起源 (上) (渡辺正隆訳), 光文社古典新訳文庫, 117 - 289
- (28) 山本一成 (2019) 保育実践へのエコロジカル・アプローチ アフォーダンス理論で世界と出会う, 九州大学出版会, 20 - 40
- (29) JJ ギブソン (1985) 生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る, サイエンス社, 7 - 16, 137
- (30) 尹煥奇 (2016) アフォーダンス概念の利用と満足研究への応用, 東洋大学大学院紀要 53, 23 - 35
- (31) 田村直樹 (2005) マーケティングとプロダクト・デザインの知, 日本デザイン学会研究発表大会概要習 52, 12
- (32) 三村信男 (2022) 気候変動への適応と社会のレジリエンス構築, 学術の動向 27 巻 2 号, 59 - 63
- (33) 島崎洋一 (2023) 気候変動適応を踏まえた果汁栽培と土壌のオーバーレイ解析, 環境科学会誌 36 (2), 42 - 52
- (34) 馬場健司, 吉川実, 大西毅弘, 目黒直樹, 田中博春, 田中充 (2019) 農業分野における気候変動適応技術の地域間での波及要因の事例分析. 土木学会

- 論文集 G75 巻 5 号, 47 - 55
- (35) 熊野直子, 田村誠, 鈴木裕子 (2019) 海面上昇に対するグリーンインフラによる適応効果と費用の検討, 土木学会論文集 G (環境) 75 (6), 151-159
- (36) 大方美香 (2021) 乳児保育における指導法—「相補的な関係」からの検討—, 大阪総合保育大学児童保育論集第 1 号, 23 - 40
- (37) 中道圭人, 砂上史子, 高橋実里, 岩田美保 (2022) 保育所における「環境設定の質」が 1-2 歳児の社会情動的能力に及ぼす影響, 保育学研究第 60 巻第 1 号, 45-56
- (38) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説, 22
- (39) 内閣府文部科学省厚生労働省 (2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説, 76
- (40) 津守真 (1970) 「集団への適応とは何か」, 幼児の教育 69 (5), 2-5
- (41) 西川晶子 (2020) 「非認知能力を育む乳児保育のための教材研究アクションリサーチ」信州豊南短期大学紀要, 51-76
- (42) 高橋芳子 (1991) 表現運動遊びによる集団的宇王の効果について: 場面緘黙傾向にある 4 歳児について, 日本保育学会大会研究論文集, 312-313
- (43) 久世妙子 (1988) 家庭の養育行動が集団適応に及ぼす影響, 日本保育学会大会論文集, 340-341
- (44) 浜名浩, 馬越由美, 浜名清美, 浅川潔司, 岡部毅 (1987) 幼児の集団適応についてその 1: 途中入園児の集団同化過程, 日本保育学会大会論文集, 310-311
- (45) 平岩定法, 赤塚大樹, 斎藤美代子, 山口延子, 小島恵美子, 伊藤洋子, 加藤道子 (1984) 幼稚園における障害児の集団適応の研究 (その 7): 障害幼児研究におけるミクロ分析の方法, 日本保育学会大会論文集, 490-491
- (46) 平岩定法, 赤塚大樹, 斎藤美代子, 山口延子, 小島恵美子, 伊藤洋子, 加藤道子 (1984) 幼稚園における障害児の集団適応の研究 (その 6): 障害幼児研究の集団適応を促すカリキュラムの検討, 日本保育学会大会論文集, 488-489
- (47) 斎藤美代子, 山口延子, 小島恵美子, 伊藤洋子, 加藤道子, 平岩定法, 赤塚大樹, (1983) 幼稚園における障害児の集団適応の研究 (その 4): 障害幼児研究の集団適応を促すカリキュラムの検討, 日本保育学会大会論文集, 524-525
- (48) 永田陽子, 水戸部明子, 馬場教子, 本多経子, 岡野美年子 (1983) 東村山市における障害児の保育および幼児相談室の役割その 2: 障害児の集団適応への援助, 日本保育学会大会論文集, 294-295
- (49) 赤塚大樹, 平岩定法, 斎藤美代子, 山口延子, 小島恵美子, 伊藤洋子, 加藤道子 (1983) 幼稚園における障害児の集団適応の研究 (その 5): 幼稚園と治療機関の親密なる連携について, 日本保育学会大会論文集, 526-527
- (50) 長尾伸子, 長崎京子, 植田ひとみ (1983) 混合保育における保育者のリーダーシップ (1): 集団適応期の仲間づくりを中心に, 日本保育学会大会研究論文集, 268-269
- (51) 千羽喜代子, 平井信義, 関真知子, 今井節子, 石橋すみえ (1977) 集団適応の過程における個人差とその要因に関する検討, 日本保育学会大会研究論文集, 95
- (52) 菅沼和恵, 高橋照子, 水沢紀美, 近藤利恵子 (1977) 幼児の集団適応への一試行: 入園時期の縦割り編成, 日本保育学会大会研究論文集, 171
- (53) 千羽喜代子, 平井信義, 関真知子, 今井節子, 石橋すみえ, 森上史朗 (1976) 3 歳から 5 歳の 3 年間の追跡研究からみた集団適応過程に関する一考察, 日本保育学会大会研究論集, 180
- (54) 平井信義, 千羽喜代子, 森上史朗, 沢文治 (1975) 幼児の集団適応について, 日本保育学会大会研究論文集, 5-6
- (55) 遠藤利彦 (2022) 「乳幼児期の社会情動的発達を支え促す環境のあり方とは—養護と教育の表裏一体性—」学術の動向 27 (6), 22-25
- (56) 黄川田美鈴, 安梅勅江, 丸山昭子, 田中裕, 酒井初恵, 宮崎勝宜 (2006) 保育園を利用する 4 歳児の発達への複合的な関連要因に関する研究: 母親のストレスに焦点をあてて, 日本保険福祉学会誌第 12 巻 2 号, 15-24
- (57) 田中裕, 安梅勅江, 酒井初恵, 宮崎勝宜, 庄司ときえ (2005) 長時間におよぶ乳児保育の子どもへの発達への影響に関する 5 年間追跡研究, 日本保険福祉学会誌第 12 巻 1 号, 23-32
- (58) 大方美香 (2016) 「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討—乳児保育研究その 2—」, 大阪総合保育大学紀要 10, pp15-30
- (59) 野澤侑希, 山内紀紀幸 (2020) 2 歳児の生活適応のための保育者の方略: A 幼稚園子育て支援センターの観察を通して, 山梨学院短期大学第 40 号, 149-168
- (60) 伊藤大幸, 中島俊思, 高柳 伸哉, 大嶽さと子, 望月直人, 瀬野由衣, 大西将史, 岡田涼, 藤田知加子, 辻井正次 (2013) 「保育記録による発達尺度 (NDSC) の構成概念妥当性尺度構造の検討と月齢および不適応問題との関連」発達心理学研究, 第 24 巻, 第 2 号, 211-220
- (61) 荻野昌秀 (2020) 「保育所における行動コンサルテーションの効果—個別の支援とクラスワイドアプローチ—」, 特殊教育学研究, 58 (3), 177



- 186
- (62) 星野亜希子, 友野佳代子 (2022) 児童福祉サービスにおける Vineland-II の導入効果について, 国立のぞみ園紀要, 92 - 96
- (63) 緒方宣拳 (2020) 日本の保育現場における「気になる子ども」への介入技法に関する研究の動向, 大阪総合保育大学紀要第 15 号, 51 - 66
- (64) 内田照彦, 増田公男 (2012) 「要説発達・学習・教育臨床の心理学」, 北大路書房, 191
- (65) 磯邊聡 (2013) 「教育臨床における発達促進部分適応」千葉大学教育学部研究紀要第 61 巻, 51 - 57
- (66) 金丸智美, 無藤隆 (2004) 「母子相互作用場面における 2 歳児の情動調整プロセスの個人差」発達心理学研究第 15 巻, 183 - 194
- (67) 金丸智美, 無藤隆 (2006) 「情動調整プロセスの個人差に関する 2 歳から 3 歳への発達の变化」発達心理学研究第 17 巻第 3 号, 219 - 229
- (68) 渡邊真帆 (2022) 幼稚園新入園児の他者とのかかわりの変容 - 登園後の身支度場面における言語的・非言語的表現に着目して -, 初等教育カリキュラム研究第 10 号, 59 - 68
- (69) 杉山弘子, 高橋亜紀, 北嶋優帆, 坂本由佳里 (2020) 幼稚園入園期の 3 歳児保育, 尚綱総研論集 (2), 61 - 72
- (70) 真嶋梨江, 岡山万里, 高橋敏之, 西山修 (2017) 幼児の園への適応とその支援に関する文献展望, 岡山教師教育開発センター紀要第 7 号, 41 - 50
- (71) 七木田敦, 林よし恵, 松本信吾, 久原有貴, 日切慶子, 藤橋智子, 正田るり子, 菅田直江, 田中恵子, 落合さゆり, 真鍋健, 金子嘉秀 (2011) 発達に課題のある幼児の幼稚園適応に関する実践的研究 - 適応過程とその関連要因検討を中心に -, 広 S 島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第 39 号, 45-50
- (72) 上村晶 (2022) 保育者と子どもの関係を可視的に描く意義, 桜花学園大学保育学部研究紀要第 26 号, 9-23
- (73) 若田美香, 田中修敬, 秀真一郎 (2022) 子どもの人と関わる力を育む保育者の集団に対する認知, 応用教育心理学研究第 38 号第 2 号, 29 - 45
- (74) 鈴木智子 (2022) 0~3 歳児の集団生活における他児との関わりの発達の变化に関する一考察 - 行動養成と集団意識の形成という観点から - 子ども教育学科論集 2, 35 - 46
- (75) Dr. Ferre Laevers (2005) SiCs (ZiKo) Well-being and Involvement in Care Settings. A Process-oriented Self-evaluation Instrument, 2005 Kind & Gezin and Research Centre for Experientel Education 3-20
- (76) 保育プロセスの質研究プロジェクト (2010) 子どもの経験から振り返る保育プロセス明日のより良い保育のために, 8